

古典の方

この数カ年の間に、現代の社会は様々な「終わり」を経験してきました。世界的な規模では、冷戦体制の終わり（資本主義に替わる社会体制やそれをつくるために社会変革を行うという考え方の終わり）、アメリカを中心とする先進資本主義文明が普遍的であるという体制の終わり（グローバルイズムの限界、貨幣資本主義の限界の露呈など）、国内的には55年体制の終わり、日本型雇用システムの終わり、戦後という時間感覚の終わり等々……。もちろんこれまでも様々な「終わり」があり、新たな「始まり」があつたのですが、現代の特徴は、「始まり」と「終わり」（あるいは「終わり」と「始まり」という歴史的な時間感覚自体も終わり、その「終わり」の感覚すらもどこかで途絶えたという無時間性にあるように思います。

つまり、時間を積み重ねてきた諸領域が境界を失いながら、巨大な消費空間である社会に飲みこまれ、消費の対象として等価にとらえられているということです。たとえば、今日学校で話題となる歴史離れとか、国語（文学）の衰退という現実には、現代社会の「終わり」の終わり、時間的な価値の消費空間化という事態を考慮に入れなければほんとうの事態は見えてこないでしょう。歴史は風化しているというより、消費され捨てられているのです（歴史を教える歴史性が教師にも生徒にも感覚されていません）。

もちろん教育も例外ではなく、社会経済のようにはつきりとした綻びが見えないまま、その「終わり」が終わらされているように思います。幸か不幸か、教育は消費空間のなかに全面的に投げ入れられることがないため、かろうじて境界（アイデンティティ）は維持されているように思いますが、すでに「始まり」と「終わり」の「サイクルは経過したと考えることができるでしょう。そして現在の教育を考えるためには、その「始まり」と「終わり」を辿ってみる必要があるでしょう。それは、教育の歴史の時間を感覚することであり、もう一つ、本書のテーマからいえば派生的なことですが、古典のもつ力を現代に感じ取るということでもあります。

古典と言えば、ヨーロッパではギリシャ・ローマの文化、日本では記紀神話や古代歌謡などをすぐ連想しますが、ここでは現在を考えるために参照できる典型的な文献という意味で考えます。その意味では、20〜30年前くらいのものも古典と言ってもいいし、それぞれの人にとって何を古典とするかも違ってくるでしょう。何を参照してよいかわからなくなり、価値がアノミー化している現代にあって、古典に触れることは現代の社会や人間に輪郭を与えるためにも大きな意味をもつように思います。本章で私はJ・J・ルソー『エミール』、J・デュイ『学校と社会』、I・イリッチ『脱学校の社会』を取り上げますが、各章でも古典と考えてもよい著書をあげています。それらは教育を考える時、常にそこに戻って参照すべき範例となる力をもっています。ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』や、マルクス『資本論』が注目を集めたのは、ど

んな呼び戻し方をされたにせよ、古典が現代の課題を切り開いていく範例としての力を内包しているからです。

さて、「始まり」と「終わり」と言っても、厳密には絶対的な定点があるわけではありませぬ。ここでは古典のもつ力を感じながら、近代の代表的な教育思想の嶺をたどって、教育の「始まり」と「終わり」の一サイクルを素描してみようと思います。

ルソー ― 教育の誕生 ―

まず、近代教育が誕生した18世紀に遡ります。

教育が、「学ぶ」という人間の活動と深くつながっていることは、誰もが認めることです。だれかに教わったり、自分で学んだり、思わず学んだと思えるようなことも含めると、「学ぶ」という行為は私たち人間の生きる営みのなかに当たり前のように組みこまれていきます。

たぶん最初の人間は自然から学んだのでしょう。その後人間は、ゆるやかな文明の発展の歴史をもちますが、大筋では長い間「学ぶ」ことは、生存し生活する過程のなかに自然に組みこまれ、それ自体として独立した様式をもつことはありませんでした。

教育は、様々な伝統社会の習俗や慣習のなかにひとりでも入りこんで、普遍的に取り出されることはなかったのです。

ところが18世紀以降急激に社会全体に出現した市場経済や国民国家の形成により、私たち人間の崩壊を意味します。もちろん伝統社会はすぐには壊れず、特に日本ではしぶとく残存しますが、近代世界は古い伝統社会のくびきを解体し、国家に統合された人間（国民）が個人として存在せずには成り立たない構造をもっていました。近代の社会になって人間は、自然のくびきから解放され、共通の社会のなかで生きる「個」である「人間」、「人間」である「個」として改められて再編成されることになります。「人間」としてどう生きるか、「個人」としてどう生きるかが近代世界の新しいテーマとなりました。

また市場社会を統治する国家にとっても、「個」として登場した「国民」をどのように統合し「国家」を存続させていくのが急務の課題となっていくきます。こうして、「学ぶ」行為は、個人・社会・国家を貫く課題として教育という独立した理念と様式をもつことになりました。すぐに学校という教育空間が成立し、教師と生徒が、「人間」そして「個人」として教える・教わる

関係の世界が成立します。伝統社会の習俗に属していた「学ぶ」様式は、それだけで独立し教育という様式が成立します。フランスの社会学者F・アリエスの言い方にならえば、ここに「教育」が誕生したのです。

ちょうどその頃、第1章でも述べたように、近代の教育について本格的に論じた人がJ・J・ルソーです。ルソーは、フランス革命前夜の1762年『エミール』を著します。その冒頭部分では次のように述べています。

私たちは弱い者として生まれる。わたしたちには力が必要だ。わたしたちはなにももたずに生まれる。わたしたちには助けが必要だ。わたしたちは分別をもたずに生まれる。わたしたちには判断力が必要だ。生まれたときにわたしたちがもってなかったもので、大人になって必要となるものは、すべて教育によってあたえられる。

この一節に異議を唱えるどんな教育論もないでしょう。これは、生まれたありのままでは人間は生きていけない、人間は力や判断力を身につけなければまともに生きていけないというあたりまえのことを言っているように見えます。ただ、ルソーは人間のもつ力や判断力はすべて教育によって与えられると敢えて言いました。ここでは、親が子を育てる養育もしつけも、教育という

枠組のなかに編入されています。『エミール』のなかの有名なことば「わたしたちは生きはじめると同時に学びはじめると」いう一節は、教育が私たちの生の営みの主要な、そして独立した動因であることを告げました。

ルソーは三つの教育があると述べています。

「わたしたちの力ではどうすることもできない」自然の教育（能力と器官の内部的発展）、「ある点においてだけわたしたちの自由になる」事物の教育（事物の刺激に対して自分自身の経験から獲得するもの）、そして「自然の教育をいかに利用すべきかを教える」人間の教育です。

ルソーの教育論の特徴は「わたしたちの手ににぎられ」自由に行くことができる「人間の教育」と「事物の教育」を「自然の教育」に一致させるようにすることです。それは、一個の「自然人」をつくることです。「役人でも軍人でも僧侶でもない」つまり「社会人」（社会的な地位と役割をもつ人）ではなく「かれはなによりもまず人間だろう」と言われ、「必要に応じて、ほかのすべての人と同じようになることができる」人間をつくることです。ルソーは、こうして「教育」とともに、「役人でも軍人でも僧侶でもない」したがって誰にでもなれる一人の「人間」を見い出しました。いわゆる「人間教育」という理念が唱えられています。

しかし注意しなければならないのは、ここで言う「人間」や「人間教育」は、ルソーの言う「自然」や「自然人」と同様、フィクションだということです。なぜなら、「役人でも軍人でも

僧侶でもない」人間は実際にはあり得ず、抽象的な存在でしかないからです。ただ、この抽象的な存在である「人間」というフィクションは、身分や政治的な階層を解体する近代社会の成立にとってはどうしても必要な理念でした。そしてこのフィクションな視線は、以後教育思想の中ではむしろある種頑迷な教育理念の立脚点になっていきます。

しかし、ルソーは学校や世間の教育に否定的です。「学校」や「世間の教育」が「自然の教育」を歪めると考えているからです。フィクションな「人間教育」の貫徹のためにはそれらがむしろ邪魔なのです。ルソーにとって教育は「能力と器官の内部的発展を十全に行なう」一人の「人間」（自然人）をつくるという理念に外なりません。だから「一人の架空の生徒」（エミール）が想定され、彼は学校からも社会からも学ばず、教師の「資格を全部そなえている」と仮定された「わたし」（ルソーと思わしき「わたし」）によるマンツーマンの教育を受けることになります。

「人生のよいこと悪いことにもっともよく耐えられる者こそ、もっともよく教育された者だとわたしは考える」と言うルソーは、身分制が崩壊し「すべてが一代ごとにはひっくりかえってしまふ現代の不安動揺」を凝視していました。ルソーの教育論は、近代社会の成立期に「社会制度がその人の自然をしめころし」てしまわないように、むしろ積極的にフィクションとしての「人間教育」を主張し、「子ども」を「学校」や「社会」から隔離し、まっすぐに人間のもつ内発力

を育てる自然教育論として今日まで大きな水脈をつくることになりました。

しかしその後、ルソーの見出した「人間」と「教育」は、それを学校が独占する時代になって、彼がそこから子どもを保護しようとした社会のしくみのなかに深く構造化されていきます。学校は近代政治や社会の要請によって強固に制度化されながら、その一方でルソーの考えた「人間教育」という理念を立脚点にして、「人間のなかに社会を組みあげる」（N・ルーマン）という独特の一領域を形成します。これが学校教育です。

デューイ ― 教育の社会化 ―

ルソーに代表される近代草創期の教育論は、「人間」の成長を主宰するものとして「教育」を発見し、「人間教育」を高らかに謳ってきましたが、市民社会や近代国家の歴史的な推移のなかで教育は学校に囲われ、制度化されて社会にひろく出現します。しかしN・ルーマンも言うように、教育はその発生の当初から「社会的過程」でありました。ルソーの教育論も社会に変形され